



筑摩世界文學大系

7

史記

II

小竹文夫 訳
小竹武夫



列伝

筑摩書房

筑摩世界文學大系 7

昭和四十六年七月二十五日

初版第一刷発行

史記Ⅱ

訳者

小竹文夫

発行者

小竹武夫

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番号一〇一―一九一

電話東京(二九一)七六五一

振替口座東京四一二三

印刷 多田印刷 製本 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0322 (製品) 20607 (出版社) 4604

目次

司馬遷

史記

小竹文夫 訳
小竹武夫

列伝篇

5

司馬遷の中国文化史上における位置と影響

季鎮淮 訳
青木五郎

446

解説

水沢利忠

452

司馬遷年譜

460

史

記

Ⅱ

史記

列伝篇

伯夷列伝第一

そもそも學問には、載籍¹がきわめて多いが、真偽のほどは、やはり六芸²に照らして考えるべきである。なかでも、詩経³と書経⁴は、なかに欠文⁵があり完全ではないが、それでも虞・夏時代のことを知ることができる。堯⁶は年老いて、帝位をのがれようと舜⁷に譲った。舜は、また禹⁸に譲ったが、いずれも岳牧⁹らみなの推薦により、官につけ職を司らせて試すこと数十年、それぞれ実績をあげたから位を譲ったのである。これは、天下は重器、王者は大統、天下を継承させることが、いかに至難であるかを示すものである。しかるに、異説をなす者があり、「堯は天下を許由¹⁰に譲ろうとしたが、許由は受けなはいばかりか、そうした話を耳にすることさえ恥として逃げ隠れた。夏の時代には下随¹¹・務光¹²なる者がいて、彼らも、また許由と同じように逃げた」と。これはいったい、いかなる根拠にもとづいたことばであらうか。

太史公言う。わたしは、かつて箕山¹³に登ったが、山上に許由の家があるとのことであった。孔子は古来の仁人・聖人・賢人の

を序列し、呉の太伯¹⁴・伯夷¹⁵の事績をもつまびらかに述べている。しかるに、わたしは許由・務光の行義がいたって高潔であったと聞いているのに、この二人に関する文辞は、孔子の刪定した詩・書に少しも見えていない。また、孔子の言葉に、「伯夷・叔斉は人の旧惡を思わず、人を恨むことがなかった。」「彼らは仁を求めて仁を得た。また何を恨むことがあろう」とあるが、しかし、わたしには伯夷の意境が悲しまれてならない。逸詩¹⁶を読むと、あたかも怨詩のごとく、伯夷の真意が疑われるからである。旧來の伝によると、伯夷・叔斉は孤竹の君の子である。父は末弟の叔斉を後嗣に立てたいと思っていたが、父の死後、叔斉は兄の伯夷に譲ろうとした。伯夷は父の命にそむくと受けず、ついに国を逃れ去った。叔斉も、また立つことをがえんぜず、兄の後を追うたので、国人は次弟を立てて王とした。

かくて伯夷・叔斉は、西伯昌¹⁷がよく老人をいたわり養うと聞き、周に往って西伯に頼ろうとしたもののようである。しかに周に行くとき西伯は、すでに死に、ついで立った武王は、木主¹⁸を車に載せて文王と称し、東のかた殷の紂王¹⁹を伐とうとするところであった。

伯夷・叔斉は、王の馬をひかえ止め、諫めて言った。「父王が亡くなられて、葬礼もおこなわぬうちに、干戈²⁰を取るのには、孝と言えまじようか。臣の身で君を弑²¹するのは、仁と言えまじようか。」王の左右の者が、二人を殺そうとすると、太公は、「これは義人である」とてたすけ去らせた。その後、武王は股を平らげ、天下は周を宗主としたが、伯夷・叔斉は、これを恥とし、信義を守って周の粟²²を食まず、首陽山に隠れて薇²³をとり、露命をつないだ。餓死に瀕するや、歌を作ったが、その文辞は次のようであった。

われ今かの西山²⁴に登って、その薇をとる。

武王は暴をもつて暴にかえ、その非を知らず。

- (1) 文獻。
- (2) 詩・書・礼・楽・易・春秋の六経。
- (3) 官名、四岳・十二牧、後の公卿諸侯。
- (4) 莊周。
- (5) 河南・發封の東南。
- (6) 詩経にぬけている詩で、采薇の詩をさす。
- (7) 韓詩外伝、呂氏春秋の類か。
- (8) 周名。
- (9) 周の文王、名は昌、西伯は西の諸侯の意。
- (10) 武王の軍師太公望。
- (11) 俸禄。
- (12) 山西・永濟か、諸説定まらず。
- (13) 首陽山。

そのかみの神農・虞・夏、忽焉として今は没し。われいづくにかゆかん。ああ往かん、命の衰えたるかな。

かくて、ついに首陽山に餓死したが、この歌詞によつて考えると、はたして恨むところがなかったものだらうか。

ある人は言う、「天道には私親がなく、常に善人に与する」と。してみれば、伯夷・叔斉のごときは、はたして善人であつたのだらうか。仁徳を積み行状をいさぎよくすること、このようにして、しかも餓死したのである。孔門七十子の徒のうち、仲尼は、ひとり顔淵を学を好むものとして推奨した。しかるに回は、しばしば飯米に窮し、糟糠にさえ飽くことができずに若死した。天が善人に報いるというのは、いったいほんとうなのだらうか。盗跖は日々に罪なき者を殺し、人の肝を膽として食ひ、暴民恣睢、数千人の徒党を集めて天下を横行したのに、ついに何の天罰もなく天寿を全うした。これはいいかないかなる徳によつたのだらうか。

以上は、矛盾のもつとも明白顯著な例である。近世にいたつては操行放埒、ひたすら人の忌み嫌うことをしながら、しかもおのれは生涯逸樂し、富貴が子孫に続いて絶えない例も少なくない。これにひきかえ、一步をあゆむにも地をえらんで踏み、一言を出すにも言うべき時にだけ言い、道を行くに徑によらず、大義名分にかかわることでなければ憤りを発しない人物で、しかもなお禍いにかかわる者の数は枚挙にいとまがないほどである。こうした現実、すこぶるわたしを困惑させる。ことによれば、いわゆる天道なるものも、はたして正しいものなのかどうか。

孔子は言う、「人は、それぞれ実践の道が同じでない、たがいに相手のためをはからない」と。これは、おのれの自分の志に従つておこなうべきことを言つたものである。だから、また、「もし、富貴が意のままに求められるものなら、賤しい執職の職でも、わたしはするだらう。もし求められないものなら、

おのれの好むところに従つて、道をおこなうだけである」と言い、さらに「年寒うして、はじめて松・栢の衆木におくれて凋落するのを知る」と言っている。世を挙げて混濁すればこそ、清廉の士が目だつのである。これは、富貴を重んずることかの俗人ばらのごときと、富貴を軽んずることの清廉の士のごときと、その対比が極端なためでもあらうか。

君子は死んでのち名聲のあらぬことを気にする。賈子曰、「貪欲なものは財貨に殉じ、烈士は名聲に殉じ、權勢を誇るものは權勢のために一命を失ひ、平凡な庶民は、ただ生活をむさぼる」と。同じ明りはたがいに照らしあい、同じたぐいはたがいに求めあうこと、雲の竜に従ひ風の虎に従うごとく、聖人が現われてこそ幾多の人材もあらわれるのである。伯夷・叔斉は賢人であるが、孔夫子の筆を得て、その名ましますあらわれ、顔淵は篤学であるが、孔子の驥尾に付してそのおこないがましますあらわれるに至つたのである。巖穴にかくれ住む隠君子においては、出処進退に時節の遇・不遇がある。許由・務光らのごときも、その名埋もれ、称揚されないのは悲しいことである。村里に住む処士で、おこないをみがき名を立てようと望むものは、青雲の土につかないかぎり、どうして名を後世に伝えられようか。

管晏列伝第二

管仲夷吾は潁水のほとりの人。若いころ、鮑叔牙と交遊し、鮑叔は彼の賢いことを知っていた。管仲は貧困のあまり、よく鮑叔を欺いたが、鮑叔はいつまでも見棄てず、彼のすることにとにかく言わなかった。やがて、鮑叔は斉の公子小白に仕え、管仲は公子糾に仕えたが、小白が父の後を嗣いで桓公となるや、競争者の公子糾は敗死し、管仲はとらわれた。しかし、鮑叔はあくまで管仲を推挙したので、管仲は登用され、斉の国政を担

(1) 孔子の弟子三千、うち六芸に通ずる者七十二人。

(2) 孔子。

(3) 顔淵の名。

(4) 凶暴で、はし

いままに白眼をむいて怒る。

(5) 御者。

(6) 賈誼。

(7) 賈誼の鸚鵡賦。

(8) 運・不運。

(9) 盛徳盛名ある人。

(10) 字は仲、名は夷吾。

(11) 安徽・潁上。

(12) 小白の兄。

任した。このため斉の桓公は覇者となることができたのである。諸侯を九合し、天下を一匡したのは、実に管仲のはかりごとによつたのである。管仲は言った、「かつて私が困窮していたころ、鮑叔とともに商売をしたが、利益を分けるとき、私は分け前を多く取つたのに、鮑叔は私を貪欲とは思わなかった。私の貧乏を知っていたからである。かつて私は鮑叔のために事業を企てたが、失敗してはいよいよ困窮したのに、鮑叔は私を愚か者とは思わなかった。時に利・不利のあることを知っていたからである。かつて私は三たび仕えて、三たびとも君から逐われたが、鮑叔は私を無能とは思わなかった。私が時の利にあわなかったのを知っていたからである。かつて私は三たび戦い、三たびとも敗れて逃げ出したのに、鮑叔は私を卑怯とは思わなかった。私に老母のあるのを知っていたからである。公子糾の敗れたとき、同僚の召忽は戦死し、私は幽囚されて辱しめを受けたが、鮑叔は私を恥知らずとは思わなかった。私が小節を恥じず、功名を天下に顯わせないのを恥としたのを知っていたからである。私を生んでくれたのは父母だが、私を知ってくれるのは鮑叔である」と。管仲を推挙したのち、鮑叔は、みずから管仲の下風に立つて敬意をはらつた。鮑叔の子孫は代々斉の俸禄を受け、封邑を領有すること十余代、常に名大夫として世に聞こえた。されば天下の人は、管仲の賢をはめるより、むしろ鮑叔の人を知る明をはめたえた。

管仲が斉の宰相となつて国政を担任すると、区々の齊ながら、海に面した地の利で、海産物を交易して財宝を蓄積し、国を富まし兵を強くし、民衆と好悪を同じくした。だからその著書でも、「倉廩がみちて民は礼節を知り、衣食が足つて人は榮辱を知る。上に立つ者が節度を守れば六親の結合は固く、四維がゆるめば国は滅亡する」と言つてある。命令を下せば、ちようど水が低いほうへ流れるように、民心に順応させた。したがつてその論ずるところは卑近でおこないやすく、大衆の望むものは、

望みに従つて与え、厭うものは、それに従つて除いた。政治の仕方は、禍いをもよく利用して福とし、失敗を転じて成功に導き、およそ事の輕重をはかるのを要務とし、均衡を得ることに慎重であつた。たとえば、實際は桓公が夫人少姫のことを怒つて、その里方たる南の蔡国を襲つたのに、管仲は事の輕重をはかつて、この機会に蔡国に近い楚を伐ち、楚が祭祀用の包茅を周の王室に入貢しないのを責めて、大義名分をよそおつた。また、實際は桓公が北のかた山戎を伐つたのに、管仲は事の均衡を得ようと、燕に恩を売つた機会に、燕を強制して建国の祖、召公の政を復活させた。また、柯の会合で、桓公は魯の刺客曹沫に強迫され、さきに魯から奪つた土地を還すや約束しながら履行しないでいたのに、管仲は禍いを転じて福にしようと、桓公に説いて約束を実行させ、これによつて諸侯を齊に心服させた。だから、「与えることこそ、取る手段であると知るのが政治の秘訣である」といわれるのである。

管仲の私財は斉の公室にも匹敵し、三廬・反坫があつたが、齊人は、これを分にすぎた贅沢とは思わなかった。管仲の死後も、齊は管仲の政策を遵奉し、常に諸侯の間で強かつた。その後、百余年で晏子が現われた。

晏平仲嬰は萊の夷維の人。齊の靈公・莊公・景公に仕え、節儉と力行をもつて齊に重んぜられた。齊の宰相となつたのちも、食事には肉二品を重ねず、妾には帛を衣せず、朝廷に在つて君から下問があれば、直言して応答し、下問がなければ自分のおこないを高潔にした。国に秩序があれば君命にしたがい、秩序がなければ君命の是非得失をはかり、おこなうべきものはおこなつた。そのため、靈公・莊公・景公の三代にわたつて、齊は諸侯の間に名声を博した。

越石父は賢人であつたが、たまたま罪を犯して、囚徒の中にまじつていた。晏子は外出の途中、彼に出会つたので、自分の

(1) しばしば会合する。

(2) 一たび正す。周室を導び夷狄を擧うなど。

(3) 鮑叔のこと。

(4) 管子。

(5) 四大綱領。

(6) 齊茅の包。

(7) 河南・内黄の東北。

(8) 朝廷より退出して帰る家が三カ所ある。

(9) 諸侯が会見の際、獻酬の礼が終わつて杯を返す土製の台。

(10) 名は嬰、字は平仲。

(11) 山東・膠東地方。

(12) 高密。

馬車の左馬を解いて罪をあがない、馬車に載せて帰宅した。しかし、晏子が何の挨拶もせず、そのまま閨房に入ると、ほどへて越石父は絶交を請うた。晏子は驚いて衣冠を整え、詫びて言った。「嬰は不仁非情の者ながら、きみを災厄から救ったのに、どうして子は、このように性急に絶交を求めるのか。」

越石父が言った。「ただ絶交したいというのではない。『君子は、自分を知らない者には屈伏するが、自分を知ってくれる者には、自分の志を伸ばす』ということがあるが、私が囚徒の中にいた間は、私を罪にした男は、私を知らない者であった。しかるに、あなたが私を贖われたのは、感ずるところがあったればこそで、いわば私を知る知己である。すでに知己であるのにしかも礼がないなら、むしろあのまま囚徒の中にいたほうがましである。」

晏子はその志に感じ、招じ入れて上客とした。

晏子が斉の宰相であつたところ、ある時、外出の際に、御者の妻が、門の隙間からうかがつたところ、夫は、宰相の御者として、大きな蓋をかかえ、四頭の馬に鞭打ち、意気揚々として、いかにも得意げであつた。やがて夫が帰宅すると、妻は離縁を申し出た。わけを問うと、妻は言った。「晏子は身の丈六尺にも足りないが、その身は斉国の宰相として諸侯に名高い。しかし先刻わたしが外出の様子を拝見すると、思慮深げで、いつも人に謙遜しているように見受けられた。しかるにあなたは、丈が八尺もありながら、人の御者となり、いかにも満足そうにしておられる。わたしが去らしていただきたいというのは、このためです。」

それ以来、御者は自分を抑えて謙遜になった。晏子が不思議に思つて問うと、ありのままを答えたので、晏子は感じ入り、彼を推薦して大夫とした。

太史公言う。わたしは管氏の著わした「管子」の牧民・山高・乗馬・輕重・九府の諸篇と「晏子春秋」を読んだが、論ずると

ころはまことに詳密である。すでに著書を見たので、事績を知りたいと思ひ伝記を整理した。著書に至つては、世間に多く伝わっているので論ぜず、ここには、それに洩れた逸事を記した。管仲は、世にいわれる賢臣である。しかし、孔子は彼を小人物とした。これは、周の王道が衰微して統率力がないとき、斉の桓公は賢をもつて聞こえるのに、管仲は王者の道をおこなわず、ただ覇者の名を成さしめたからであらうか。古語に「その君の長所を助長し、その短所を匡正してこそ、上下相親しむ」というのは、管仲などに対して言うのであらう。

晏子が、逆臣のために弑せられた斉の荘公の尸に哭泣し、一応の礼をすまずと、そのまま立ち去つて、賊を討とうとしなかつた。これは、いわゆる義を見てなさざる卑怯者だったのだらうか。しかしながら、彼が君を諫めるとき、少しも君の顔色などに容赦しなかつたのは、いわゆる「進んでは忠を尽さんことを思い、退いては過ちを補わんことを思う」ものと言うべきであらうか。かりに晏子が、こんにち生きていたら、わたしは彼のために鞭を執り、御者となつて仕えようと思うほど慕わしい気がする。

老子韓非子列伝第三

老子は楚の苦県厲郷曲仁里の人、名を耳、字を聃、姓を李氏といい、周の藏書庫の記録官であつた。孔子が周に行つた時、老子に会い、礼について質そうとすると、老子は言った。「きみが纂う上古の聖人も、その身はおろか骨さえ朽ちてはて、いまはただ空しいことばを残すだけである。とかく君子は、時を得て用いられれば馬車に乗る身となり、時を得なければ空しい身となるもの。『良賈は品物を奥深くしまひこんで、外見は空しいようにみえ、君子は、すぐれた徳を身の内深くそなえて、外貌は愚かなようにみえる』と聞いているが、きみの高慢

(1) 日本の五尺たらず。

(2) 河南・鹿邑。

(3) 商売の上手なちゃんとした商人。

と多欲と、もったいぶりとまよいの念を取り去り給え。それらはきみに何の益もないもの。私がきみに言いたいのは、ただこれだけである。」

孔子は辞去して弟子に言った。「鳥ならばよく飛び、魚ならばよく泳ぎ、獸ならばよく走ることとは、私もよく知っている。走るものは網を張って捕え、泳ぐものは糸を垂れて釣り、飛ぶものは罠をもって射落すことができる。しかし、竜にいたっては風雲に乗って天にあがるといふが、私には実体がわからない。私は今日、老子に会ったが、竜にさながらと言おうか、まったく、つかみどころがなかった。」

老子は虚無清静の道の徳を修め、その学問は、みずから才能を隠し、無名でいるのを要旨とした。永らく周にいたが、周が衰微したので、ついに去って閑にいたった。閑の役人尹喜が、「あなたはいまや隠遁されようとする身、せめて、わがために書を著わし給え」と言ったので、老子は上下二篇の一書を著わし、道德の意味を五千字あまり記して立ち去ったが、その後、老子の最後を見とどけた者はなかった。ある人は言う、「老萊子も楚の人で、十五篇の書を著わし、道家の功用を述べた。孔子とは同時代の人である」と。老子は享年百六十余歳といひ、あるいは二百歳ともいふ。長生したのは、道德を修め養生をしたせいであろう。

孔子の歿後百二十九年の史官の記録に、「周の太史儋なる者が秦の獻公に謁見して言うよう、『秦ははじめ周と合い、合うことと五百年にして離れ、離れること七十年にして霸王たる者が現われよう』と」とある。ある人は、この儋こそ老子であるといひ、またある人はこれを否定して、世に真偽を知るものはない。要するに、老子は隠君子である。老子の子は、名を宗といひ、魏の將軍となり、封ぜられて段干を領地とした。宗の子は、名を注といひ、注の子は宮、宮の玄孫は仮、仮は漢の文帝に仕えた。仮の子解は膠西王卬の太傅となり、それ以来裔に定住した。

世間では、老子を学ぶ者は儒学を排斥し、儒学の徒は、また老子の学を排斥する。「道が同じでない」とがいに相手のためにはからない」とは、何とこうしたことを言うのであろうか。

莊子は蒙の人、名は周、かつて蒙の漆園の役人となった。梁の恵王や齊の宣王と時代を同じくした。博學で、通曉せぬ書物はなかつたが、学問の根本は老子の説に帰着する。だから、著書は十余万字に、おおよそ大著であるが、おおよそ老子の道を引き延ばして説いた寓話である。漁父・盜跖・胠篋の諸篇を作ったのは、それで孔子の徒をそしり、老子の學術を明らかにしようとしたもの。畏累虚・元桑子などの諸篇は、みな架空の話で、その事實はない。しかし文辭を綴りつらねることに巧みで、世事を指示し、人情を推察し、これによって儒家や墨家を攻撃したので、当時の碩學でも鋭鋒をさけることができなかった。

その言は大海のごとく、はてしなく、とりとめなく、奔放であった。それゆゑ、王公・大人からは優れた人物として扱われなかつたが、ただ楚の威王は莊子の賢を聞いて使者をやり禮物を厚くして彼を迎え、宰相にしてもよいと言った。莊子は笑つて楚の使者に言った。「千金と言へば大金であり、宰相といへば尊位である。きみはまさか郊の祭に供える犠牲の牛を知らぬこととはなからう。数年がかりで飼育し、文繡の衣を着せられるが、最後には太廟に供えられるのである。その時になつて小豚を養んでも、どうにもなるまい。きみはやく帰ら給え。私を汚し給うな。汚されるくらいなら、私はむしろ汚濁の中に遊び戯れて、みずから快としよう。国の主権者に拘束されたくはない。終身仕えないで、自分の志を快適にしたいだけのことである。」申不害は京の人。もと鄭の国の賤臣であつたが、法術を學んで韓の昭侯に用いられたことをとめ、昭侯は彼を登用して宰相とした。内は政治・教育を治め、外は諸侯に應接すること十五年、このため申子の死ぬまで國は治まり兵は強く、韓を侵す

- (1) 糸をつけた矢。
- (2) 函谷関か。
- (3) 老子のあざな、聃と同音。
- (4) 魏の邑名。
- (5) 河南・商邱の東北。
- (6) 地名か、漆の栽培園か。
- (7) 郊外で天を祭る儀式。
- (8) 河南・滎陽の東南。
- (9) 子は敬称。

者がなかった。申子の学問は黄帝・老子にもつぎ、**刑名**の術を主とする。一書二篇を著わし、「申子」と題した。

韓非は韓の諸公子の末流である。刑名・法術の学を好んだが、帰着するところは黄帝、老子の学であった。非は生れつきどもりで、弁舌にまづかったが、著述をよくした。李斯と共に荀卿に師事し、才能では斯自身も非には及ばないと思うた。韓の国士が削り弱められるのを見、非はしばしば書簡をもって韓王を諫めたが、韓王安は非を登用することができなかった。こうしたことから韓非は、為政者が国を治めるのに、法制を修明し、権力で臣下を制御し、国を富まし、兵を強くし、人材を求め、賢人を用いることを務めないばかりか、かえって浮淫の蠹を用い、しかもかれらを功勞実績ある者の上に置くのを苦々しいこととした。そして思うよう、「儒者は文学で国法を乱し、遊俠の徒は武力で国禁を犯している。泰平無事の時には、名声ある文人を寵用するのよいが、国家危急の時には、甲冑の武人を任用すべきである。いま国家危急の時、禄を与えて養うのは國家に役立つ者でなく、役立つ者は國家が用いない」と。

かくて韓非は、廉直な人物がよこしまな権臣のために用いられないのを悲しみ、いにしへの王者の政事における成敗得失を考え、孤憤・五蠹・内外儲・説林・説難などの諸篇十余万字の文章を綴った。しかるに、韓非が遊説の困難さを知って作った説難篇は、すこぶる完備したものであったのに、彼自身ついに遊説の効なく、秦に歿して、みづからその禍いをまねがれることができなかった。説難篇には次のように述べられている。

「およそ遊説の困難とは、わが知識をもって相手を説得することの困難ではない。また、わが弁舌によつて相手にわが意志を徹底させたり、自分が縦横無尽に言いつくすことの困難でもない。およそ遊説の困難とは、相手の心情を洞察し、相手の心情にわが説をうまく当てはめることのむずかしさである。相手が

名聞欲に駆られているとき、利益をもつて説けば俗物として卑しめられ、かならず遠ざけられる。相手が利益を望むとき、名聞をもつて説けば没常識で世事に迂遠とされ、用いられないにきまつている。相手が内心利益を望みながら、表面に名聞を望むとき、これに名聞を説けば、表面用いるふりをしても、内心では、ひそかにうとんずる。もし、これに利益をもつて説けば、内心ひそかに、その説を採用しながら、表面では、それを遠ざける。そうした機微をこそ知らなくてはならない。

そもそも事は秘密の保持によつて成就し、言葉の漏洩によつて失敗する。しかるに遊説者は、とかく君主が心に秘めている事柄に言及することがある。そのような者は命が危うい。また遊説者が貴人のなかに過失の端緒を看とり、明白な正論をことさらに言い立てて、その落度を追窮したとすれば、やはり命は危うい。遊説者が、まだ君主のあつい恩情にも浴していないのに、言説に含蓄のある知恵をひそめるのは、その説が効果をあげ功を奏しても、格別に徳とせられず、効果をあげずに失敗すれば、あらぬことさえ疑われる。そのような者の命も危うい。いったい、貴人が他人からはかりごとを得、それによつて自分の功を立てたいと思うとき、遊説者がかかりことこの出所を関知すれば、命は危うい。君主が表向きあることをおこなうようによそおい、裏面では別のことをおこなうと思つているとき、遊説者が、それを関知すれば、命は危うい。人君に対して、とうてい手に及ばぬことを強いたり、騎虎の勢いで中止できないことを止めさせようとしても、命は危うい。だから、君主とともに、明君賢主を論ずれば、暗に君主をしろものと疑われ、微賤の者を論ずれば、それとなく自分を売り込むものとされ、君主の寵愛する者を論ずれば、これを利用して取り入るものとされ、君主の憎む者を論ずれば、これによつて君主を試すものとされ、ことばを飾らず、省略して端的に表現すれば、無知な者としてあなどられ、ことばあふれて引証該博にすぎれば、多

(1) 形名(名実)に同じく、法術によつて名(議論)と実(実態)の一致を求める学。
(2) 木中の虫、蟬
(3) 韓非子。

弁で暇つぶしとされる。事柄に順応して意見を述べれば、臆病で意を尽さないと言われ、あらかじめ事柄を見込んで、存分に意見を述べれば、野郎で傲慢だと言われる。これが遊説の困難なわけであり、心得おくべきところである。

およそ遊説のこつは、相手の君主のはこりを満足させ、その恥するところに触れないことにある。相手が、おのれのはかりごとを智謀と自信するなら、その欠点を指摘せず、おのれの決断を勇と自認するなら、それに備つて相手を怒らせず、また、みずからの力を自負するなら、その困難をあげて勇氣を沮喪させてはならない。別のことで、たまたま君主のはかりごとと同じいはかりごとをもつ者があれば、その人を誉めそやし、別の人で、君主の汚行と同じ汚行ある者があれば、その人を取りつくりつて傷つけることなく、また君主と同じ失敗をした者があれば、これを失敗ではないと取りつくりうべきである。大忠は純粹で、他意のないものであるから、君主に逆らうところがなく、君主を感悟させることばであるから、排撃的なところがなく、その範囲内で、自分の弁才・智力を伸ばす。これが君主に親しまれて疑われず、おのれの弁舌をつくすゆえんである。日を経ること久しく、君の恩情があつくなつたのならば、深く立ち入ってはかたても疑われず、君ともども争論し、諫めても罪せられず、明らかに利害を打算して、わが功績を立て、是非を直言して、わが身に錦を飾る。このようにして君と臣とたがいに傷う。このないのが遊説の成功である。

殷の湯王の宰相伊尹が、かつて料理人であり、秦の穆公の宰相百里奚が俘虜であつたのも、みな、これを手段として君主に任用をもとめたのである。この二人はいずれも聖人でありながら、世をわたるにかくも身を勞し、けがれたことをせずにおられなかつたのである。してみれば、才能の士としても、これを恥じることはない。宋の国に一人の金持がいた。雨が降つて土塀が崩れたとき、その子が『築き直さなくては、やがて盜難が

あろう』と言つた。隣家のおやじも、またおなじことを忠告した。夜になつて、はたして盜難にあい、大いに財貨をうしなつたが、その家では、その子をまことに賢いと思ひ、隣家のおやじには嫌疑をかけた。むかし、鄭の武公が胡を伐とうとして、わがむすめを胡の君にめあわした。そして群臣に向かつて、『わしは出兵したいのだが、誰を伐つべきだろうか』と問うた。関其思という者が、『胡を伐つべきであります』と答えたので、関其思を誅殺した。その時、武公の言うよう、『胡は兄弟のよしもある国である。なんじが、これを伐てと言うのはどうしてだ』と。胡の君は、このことを伝え聞き、鄭はわれに親しむと判断して用心しなかつた。鄭の兵は、不意に乗じて胡を襲ひ、その国を奪つた。この二人の言つたことは、知恵としてはどちらも妥当であるのに、はなはだしきは誅殺され、あるいは少なくとも嫌疑をかけられた。こうしたことは、知恵を出すことが困難なのでなく、知恵の用い方が困難なのである。

むかし、弥子瑕なる男が衛の君に寵愛された。衛の法律では、ひそかに君の車を乗用する者は、刑罪に処せられることになつてゐた。弥子の母が病氣したので、ある人が夜分、弥子のもとに行つてこの由を告げた。弥子はいつわつて君の車に乗り宮門を出た。衛君は、これを聞いて彼を賢とし、『何と孝行なことか。いかに母のためとはいへ、刑罪をもととせず』と言つた。また、あるとき、君と果樹園に遊んだ。弥子が一口桃を食べ、すこぶる甘かつたので、食べさしを君に奉つた。衛君は、『何と愛情の深いことか。自分が口をつけたことさえ忘れて、余のためを思つてくれるとは』と言つた。弥子の容色が衰えて、君の愛もさめ、あることによつて咎めを受けた。すると衛君は、『弥子は、かつていつわつてわしの車に乗り、また、かつて、わしに食べさしの桃を食わせた。不埒なやつである』と言つた。弥子の行為は、初めもあとと変わらないのに、さきには賢いこととされ、あとには罪あることとされたのは、愛憎が激変した

からである。したがって、主君に愛せられているときは、知恵が主君の氣になつてますます親しまれ、反対に、憎まれているときは、罪にあたるとして、いよいよ疎まれるのである。だから、諫言遊説の士は、主君の愛憎のほどを洞察したうえで、説かなくてはならない。かの竜という爬虫は、飼ひ馴らせば、その上に騎乗することができるが、ただ、喉もとに逆鱗があり、直径一尺ばかり、人がこれに触れるとかならずその者を殺すという。主君にもまたこの逆鱗がある。遊説者にして主君の逆鱗に触れることがなければ、まずは成功にちかい。」

この書物を持って秦に來た者があつた。秦王は、その孤憤・五蠹の諸篇を見て言うよう、「ああ、わしは、この著者に會つて交遊することができれば、死んでも本望である」と。李斯が、「これは韓非の著わした書物であります」と言つた。秦王は、韓非に會う手段として、急に韓國を攻めた。韓王は最初、韓非を登用しなかつたが、危急に及んで、非を使者として秦につかわした。秦王は非に會つて氣に入つたが、まだ信用して登用するにはいたらなかつた。李斯・姚賈らは、非が用いられば自分らに不利と思ひ、彼をそしつて言つた。「韓非は韓國の公子の末流であります。いまわが王が諸侯併呑の大望をもたれるとき、非を登用しても、結局は韓のためをはかつて、秦のためにはならないでしょう。これは人情であります。いま、王が非を登用せず、久しく留めおいたうえ掃されるのは、禍いを後日のにこししましょう。酷法にあてて、誅殺するのが一番です。」

秦王は、もっとものことに思ひ、非を役人の手に渡して処分させた。李斯は使ひをやつて非に毒藥を送り、自殺を迫つた。韓非は、みづから王に陳弁したいと願つたが、謁見できなかった。秦王は後でこれの後悔し、使ひをやつて赦免しようとしたが、すでに非は死んでゐた。申子・韓子は、いずれも書物を著わし、後世に伝えられて、これを学ぶものが多かつた。わたしは、韓子が説難一篇をものしながら、しかもみづから、その禍

いをはがれ得なかつたことを悲しむものである。

太史公言う。老子が貴ぶところの道は、虚無で実体がなく、自然により、変化に応じ、無為のうちに千變万化する。だからその著書の言辭は微妙で、理解しにくいといわれる。莊子は、老子の道德を敷衍し、奔放に議論しているが、要するに、また道德を自然の道に帰結するものである。申子の学は卑近で、道德を刑名・法術にうつして施行するもの。韓子は、これを法律によつて割り切ること繩墨を引くごとく、事情に切実にし、理非曲直を明確にしたが、その結果は残酷で人間味を欠いた。以上の学説は、いずれも道德の旨意にもとづくのであるが、深遠なのは、ただ老子のみである。

司馬穰苴列伝第四

司馬穰苴は田完の後裔である。齊の景公の時、晋が阿・甄を攻め、燕が河上を侵した。齊軍が敗北したので、景公はすこぶる憂慮した。ときに、晏嬰は田穰苴を公に推薦して言うよう、「穰苴は田氏の妾腹の出でありますが、文においては衆を引きつけ、武においては敵をおどすことのできる人物であります。願わくは、君みずからお試しのほどを」と。

景公は穰苴を召して、兵事を語つたが、大いに氣に入り、將軍に登用した。兵を率ひ燕・晋の軍を防ぐこととなつて、穰苴は言つた。「わたくしは、もともと身分卑しく、君に、卒伍の中から拔きんでられて、大夫の上位に置かれるようになりませんが、まだ士卒には心服されず、庶民にも信頼されておりません。だから、人物に重みがなく、權威にも乏しゅうございます。願わくは、君の寵臣であり國人にも尊敬されている人に、軍を監督していただきたい。」

景公はこの願いを許し、莊賈という者を同行させることにした。穰苴は景公にいとまごいしてから、莊賈と、「明日正午、

(1) 齊の邑、山東・陽穀。

(2) 齊の邑、山東・濰縣。

(3) 黄河南岸地方。

軍營で会おう」と約束した。翌日、穰苴はまず軍營に駆けつけ、日時計を立て水時計を仕掛けて賈を待った。賈は平素から驕慢であつたが、この時も、將軍が軍營に在る以上、目付役の自分はさまで急ぐにおよばないと、親戚友人の送別を受け、留まつて酒を飲んだ。正午になつても賈が来ないので、穰苴は日時計を伏せ、水時計の水をもらし、軍營を巡視して兵を整頓し、軍令を示達した。軍令のことも終わつて、夕方になり、やつと莊賈が来た。穰苴が問うた。「どうして刻限に、おくれたのか。」賈が、「ふつつかなことであつた。大夫・親戚らが送別してくれたのでおくれた」と詫びると、穰苴は言つた。「將軍たるものは、出陣の命令を受けたその日から家を忘れ、軍に臨んで軍令を発すれば肉親を忘れ、撓をとつて軍鼓を打つこと急なれば身を忘れるものである。いま、敵が深く侵入して国内騒動し、士卒は國境を守つて、身を風雨にさらしている。國君は席についても安眠できず、食べても味がわからず、民の命は、すべて國君の一身にかかつてゐる。このとき、送別などとはなにごとか。」そこで、すぐ軍正を招いて問うた。「軍法で、刻限におくれたときの罪はどうか。」「斬罪であります。」莊賈は、おそれて從者に命じ馬を馳せて、景公に告げ救いを請わせた。穰苴は、從者がまだ歸つて来ないうちに莊賈を斬り、これをあまねく三軍に示して戒めとしたので、士卒はみな震えあがつた。

ほどへて、景公は使者をつかわし、符節を持って賈を赦免しようとした。使者が馬を馳せて軍營の中に入り入れると、穰苴は使者に言うよう、「將たる者は、陣中におるかぎり、君中で、きかないことがある」と。さらに軍正に向かい、「軍營の途中で馬を馳せることは許されていない。いま使者は營中でありました。その罪はどうか」と言つた。軍正が、「斬罪にあたります」と言ふと、使者は大いにおそれた。しかし、穰苴は、「國君の使者は殺すべきではない」と言つて、その御者と車の左側の轡と、左の副馬を斬り、三軍に示威した。一方、景公には使いを

やつて報告させ、はじめて出動した。

士卒の宿舎・井戸・かまど・飲食をはじめ病氣の見舞い・医薬のことまで、みな身をもつて心をくばり、將軍としての給与はすべて士卒に振舞ひ、みずからは士卒と糧食を等しくし、しかももつとも虚弱な士卒が食う分量に準じて。このため三日にして兵は整備され、病人もみな同行をのぞみ、先を争ひ奮い立つて戦地に赴いた。晋軍は、これを伝え聞いて、戦さをやめて退却し、燕軍も、これを聞いて黄河を渡つて解散した。そこでこれを追撃して、さきの失地を奪還し、兵を率いて歸つた。國都掃還に先だつて、隊伍をとき、軍令を解き、國君に対する忠誠を誓わせてから都にはいった。景公は大夫たちとともに、郊外に出迎えて出征をねぎらい、凱旋の礼をおこなつた。ついで正寝に歸り、穰苴を引見して、大司馬に任命した。

かくて、田氏は齊において一日と尊敬されるようになったが、やがて大夫の鮑氏・高昭氏・國惠子のものがら穰苴を忌み嫌い、景公に讒言した。このため景公は穰苴を退け、苴は病いを発して死んだ。一族田乞・田豹の徒は、このことで高・國らを恨んだ。

その後、田常が齊の簡公を殺すにおよんで、高・國の一族をことごとく滅ぼした。田常の曾孫、田和にいたつて自立し、その孫、田因は、ついに即位して齊の威王となつた。兵を動かし威力を示すことでは、大いに穰苴の方法をまねた。それで、諸侯はみな齊に入朝した。威王は大夫に命じて、いにしへの司馬兵法を研究させ、それに穰苴の法を加えて書き著わし、名づけて「司馬穰苴兵法」といった。

太史公言う。わたしは司馬穰苴の兵法を読んだが、論ずるところ範圍廣大、思想深遠で、夏・殷・周三代の聖王の戦争も、これはど深遠な意義を宣揚したものとは言えない。また、文章も事実をこえた褒めすぎで、三代でさえ、そうであるなら、まして穰苴が、区々たる小國齊のために兵を用いた際など、どう

- (1) 軍の法務官。
- (2) 上中下の三軍、主軍の意。
- (3) 御者がもたれる木。
- (4) 表御座所。
- (5) 用兵が礼讓にもとづいている点を指している。

して司馬兵法の礼法を適用する暇があっただろう。世間には、はやくから司馬兵法が多く伝わっているのに、ここには論ぜず、ただ、稷直の列伝だけを記した。

孫子呉起列伝第五

孫子は名は武、齊の人である。兵法にくわしかったので、呉王闔廬に謁見することができた。闔廬は孫子に言った。「きみの著書十三篇は、わしはみな読んだが、試しに、すこし実際の練兵を見せてくれないか。」「よろしゅうございます。」「婦人を使つてやってくれるか。」「よろしゅうございます。」「

そこで王は婦人の出動を命じ、宮中の美女百八十人をくり出した。孫子は、これを二隊に分け、王の寵姫二人をそれぞれ隊長とし、みなに戟を持たせ、命令して言った。「なんじらは、自分の胸と、左右の手と背とを知っているか。」「婦人らが「知っています」と答えると、孫子は、さらに言った。「前」と号令した時には胸を、「左」と号令した時には左手を、「右」と号令した時には右手を、「うしろ」と号令した時には、背のほうを見よ。婦人らが、「はい」と言つたので、軍令を布き、刑罰用の鉄鉞を用意したうえ、三たび軍令を示し、五たびこれを説明した。そこで、太鼓を打つて「右」と号令すると、婦人らは大いに笑つた。孫子は、「軍令が明瞭でなく、号令の徹底しないのは、將たるものの罪である」として、また三たび軍令を示し、五たびこれを説明した。そして、太鼓を打ち「左」と号令すると、婦人らはまた大いに笑つた。

孫子は、「軍令が明瞭でなく、号令が徹底しないのは、將たるものの罪である。しかし、軍令が、すでに明瞭なのに、規定のとおりにならないのは、隊長の罪である」として、左右二人の隊長を斬ろうとした。呉王は台上から見ていたが、孫子が今にも愛姫を斬ろうとするので大いに驚き、ただちに伝令を出して

言わせた。「わしは、もはや將軍が用兵の達人であることがわかつた。わしには、この二人の婦人がいないと、何を食べてもうまいとは思えないのだ。斬るのだけは、勘弁してくれ。」「孫子は言つた。「わたしは、すでに命を受けて、將となつています。將たる者は、陣中におけるかぎり、君の命といえども、きかないことがあります。」「

ついに隊長二人を斬つて、みなの見せしめとし、その次の者を隊長とした。そして、また太鼓を打つたところ、婦人らは左し右し、前し後し、ひざまずくもたつも、みな規定の法にかなひ、声を出すものもなかった。そこで孫子は伝令をもつて王に、「すでに兵の訓練を終えました。王には、試しに台より下りてご覧あれ。行かせたいと思ひ召す所は、たとい水火の中でも、ひるみはしません」と報告した。王は、これに答え、「將軍よ、休息して宿舎につき給え。わしは台から下りて見たいとは思わない」と。孫子は言つた。「王はただ、兵法の議論を好まれるだけで、実地に応用することができない。」「

こうして、闔廬は孫子が用兵に堪能なことを知り、ついに彼を將軍とした。呉は西のかた強國の楚を破つて、都の郢都に入り、また北のかた齊・晋を威嚇して、諸侯の間に名声を挙げたが、これにはあづかつて孫子の力が多かった。孫武の死後、百余年して孫臏というものが出た。

臏は阿・鄆の近くの生れで、孫武の子孫である。孫臏はかつて龐涓とともに兵法を学んだ。涓は魏に仕え、のち恵王の將軍となつたが、自身の才能が臏に劣ることを思い、ひそかに使いをやつて臏を招いた。臏が魏に来ると、涓は臏が自分よりまざつて、いるのを恐れ嫉んで罪におとし、刑にあてて両足を切断し、いれずみを施し、隠して人に会わさないようにした。たまたま、齊の使者が魏の都の梁に來た。臏は罪を受けた身として、ひそかに使者に會つて話をした。使者は臏を得がたい人物と思ひ、ひそかに自分の車に載せて齊に帰つた。齊の將軍田忌

(1) 孫子・十三篇
(2) 左右に枝のあるはこ。

(3) 湖北・江陵。
(4) 大梁のこと、河南・開封。